当時をふり返って…

近藤　嘉明さん
北区・会社員

昭和十九年八月、赤羽から汽車に乗り上州福島駅で下車しました。ここで一緒に乗ってきた学童疎開の子供たちはいくつかの組に分かれ、それぞれの宿泊先へと向かいました。私の受け入れ先は轟の宝積寺でした。

夕陽のさす道を、不安と好奇心の入り混じった気持でトボトボと歩いて行きました。子供心にも、この道のりがとても長かったように記憶しています。

当時の宝積寺は、茅葺（かやぶき）屋根にペンペン草が生え、うっそうとした感じでした。夜中に目がさめると、そばに置いてある木魚（もくぎょ）がお化けに見えたりして、非常に怖かったことを覚えています。

あれから四十年、同じ疎開した仲間から苦労話しを聞くたびに、たとえ数か月の間でも温かく迎えてくれた住職さん、地元の人たちに感謝しています。

長い人生の中で、この時受けた温かさが、大きなプラスとなっています。

富岡武十郎さん
善慶寺・農業

私の家には、疎開の子供たちの面倒をみる寮母さん二人（当時十八・九歳）が、やはり疎開者として来ていました。

子供たち（福厳寺に宿泊）の用事が済むと、縫い物を手伝ってもらったりして大変たすかりました。

戦争が終わってからも、東京の方は荒廃がひどいので、私の家で三年くらい生活を共にしました。これが縁となり、今でも毎年お客に行ったり来たりして、親せきのような交流が続いています。

今日は、私の家へ泊ってくれるので本当にうれしく思います。

野沢　信夫さん
北区・会社員

私は、宝積寺で七か月間お世話になりました。

当時の記憶と言えば、とにかくいつもおなかがすいていて、何でもいいから腹一杯食べてみたかったということだけが強く印象に残っています。

小学校の帰り道など、農家の軒下に干してある切り干しやギンナンの実などをよく失敬しては先生にしかられたこともありました。

あのころは、飢えと緊迫感でピリピリしたような毎日でしたが、まわりの人たちは、みんな人情の厚い人たちで、苦しい中にも家族的な温かさがあったように思います。

昭和四十八年には、お世話になった人たちを伊香保温泉に招いて、戦争のためできなかった卒業式を行いました。

河原　きくさん
小幡・主婦

私の寺（長厳寺）には、七八十人の子供たちが宿泊していました。まだ小学校四年生と六年生の幼い子供たちでしたが、飲み水やおふろの水くみなど、仕事もよくする子供たちでした。

ごはんと言ってもほとんど芋ばかりで、たまに幾粒かのお米が浮いている程度の粗末なものでしたが、食前には郷里（東京）にいる父母を思い必ず合掌してから食事を取る姿を見る時は、思わず涙が出ました。時々慰問袋が送られてきましたが、中には何も送ってもらえない子もいて、こっそり私が包みをこしらえてやったこともありました。

世話をした期間は、わずかでしたが、みんな人情に厚い方たちで、今でも交流が続いています。

今日は、実家に帰ってきたつもりでゆっくりくつろいでもらいたいと思います。私はこの人たちを自分の子供だと思っているので、いつでも温かく迎えてやりたいと思います。

高野十美枝さん
調布市・主婦

田舎の生活は初めてだったので、小幡に来た時は非常にとまどいました。

毎日、川へ水くみに行ったり、山へまきを拾いに行ったりで、楽しみといえば週に一度、近くの農家へ手伝いに行くことがあって、そこで食べ物をもらってお腹一杯食べられたことが、何よりもうれしかったことを覚えています。

また、小学校の朝礼の時、前に並んでいる生徒の頭にシラミがゾロゾロ動いているのを見た時には、ビックリしました。今の子供たちには想像もつかないことでしょう。

もう二度と戦争を起こしてはなりませんが、あの苦しい時代を生き抜いてきたことが良い面でのプラスになっていると思います。

私は、甘楽町をふる里と思っています。